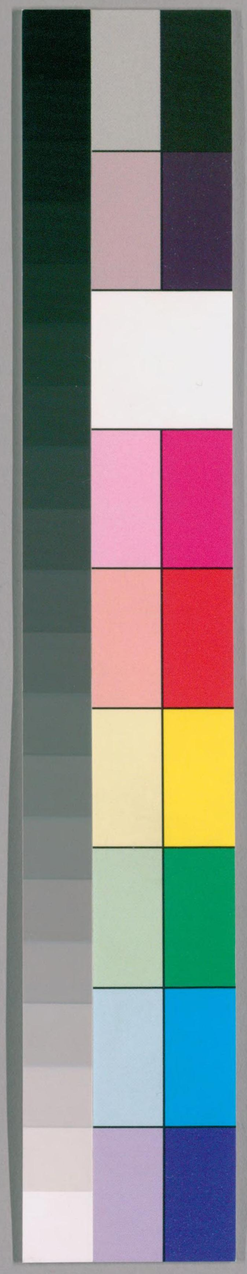
古今集遠鏡 20

貴重圖書
WA 18
7
4



国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7

ガラス使用

古今和歌集巻第十一

意歌一

[illegible]

よみ人しらず

郭公ねくやうつきぬあや[illegible]ぬ意もとるか

○上ドノヤウナワケナ物ヤラマダシラズニワキマアムチヤナ意ヲスルヿカナ

素性法師

青ふのゝさくらぬ志くゝ家よるハおきそ[illegible]ふ[illegible]ぬべ

○青ニキクバカリデ の白雪 マダアルメヿモナイ人ヲ思フテ 歌ハ子ラレ子バ

オキテフ居テ 昼ハ意ニサニエコメヘイデ消サウニ思ハレル

国立国会図書館

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7　ガラス使用

紀ノ貫之

よし野川いを治るくゆくあ所もやくぞ人をおりひそめてし

○上トウカウサ人ヲ思ヒソメタ　藤原ノ勝治

白浪乃河と聞きこゝろ乃ゆく私も風ぞしてより所志るべなりける

○浪ノ上ノ人ノトホツタ跡モナイ方ヘイク舟デモ風ト云物ガサテ手ヨリノ

案内者ヂヤソレニワシガ意ハソノ風ヤウナタヨリニセウ物サヘナイワイノ

絶材打咲ちをふるゝ　例をもて知べし

左原ノ元方

青羽山おとふきてつゝ河の坂乃実所こゝろにふとし残るかね

○青羽山ハ和坂ノ実ノコチラニアル山ヂヤガ　ちゝ山ノ名ノトホリコナタデ青

ニハキヽナガラ実ガアツテエコエズニコチラニヂツトトマツテコ居ルヤウニ　和坂

ト云名ノトホリ忍人ニエアハズニ何年モタテルフカナ　サテモ不ウ逢タイ

二立ちり河ハ逢とぞ思ふ一よそふても人りん残おきあり志し治

○三しヤウニハナレテコ居テモ心ハ常ニ他カノ人ノ所ヘバツカリイテ居レバ　つ白浪

一又シテモ〳〵二アヽハレ逢タイフヤトサ思フ　打咲いとうるし

はしゆき

世中をかくこそ有ケ逢ぬく風乃めふ人も意しかりけり

○ヨノ中ト云モノハマアカウシタフヂヤソイマア咲テトサレ　三マダ一月モ

○ヌタコトモナイ人モ此ヤウニ意シイチヤワイ

太近のこ母ぞ此 キヨヲ引折 ゑ君ぞ此日むかひ尓こそ行く家車の下

五月四日ヨリ五日ノ間 競馬アリ アラテ使ニテ キヨナシ

ほぐ道より女ぞ此ゑ君ぞ此のふ君ゑ道バよこそつかはし

ゑ家

左京ノ頼りしの頼信

ゑ君りといふ名は紳中郷の説のことく頼るべし

ゑぞも詠しぬみもせぬ人の意しくハ詠や頼くそ女や頼かめつらさん

○ヌヌデモナシヌタデモナイ人ガ此ヤウニ意シイチヤガ コレデハワケモナ

イフニ今日ハ一日シンキニ思フテクラスデアラウカ

かくし

よみ人志しぬ

さる志しぬ何かあや頼くかていふもむしひのこそ志るべ有り

ワケモナイ

○ヌタノヌヌノトカテハ何ノイハウフゾ ソヤワケモナイフチヤ 意ト云モノハ

何やなく

ヌヒハカリコソハ イツヅハアハレルシルベナレ モカノフハナニモドウコウト云フハナイワ

イナ

かそかぞまつりふまかしりける時ふ物ゑふ出たりける

女のもとに頼ぬらづ○てつかはせりをる

みふの毎じこ家 六位家人ニ在事年年ノ役ニ 春日ヘマヰリシナリ

春日神ノ電ノアヒダカラハエデヽクル菓ノチツトバカリヌエソメタヤウニ ハツ

ハツニ チヨツトヌエタ人ツイノマア

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7

人乃花つゝし家と家ホまかりてそこ有りける人のも
少し爾のちふよゝてつかはしける　清ゝゆき
山様鹿のまゝよりと注のかふもみてし人こそこひしかりけれ
○山様ノ花ヲ鹿ノ為カラアルヤウニウスヽトアルタ人ガサアサテヽ意ミイフ ヂヤツイ
歌しらべ　をしかゝ
毎よりと爾もいふ人ぬ思ひ乃詞やし紀ゆんを人りつゝる事り告
○位ゾノタヨリニコソ物ハコトヅケテヤルモノナレ タヨリデモナイ此ツシガ思ヒノカハ
ツタフハ此ヤウニ思フ心ヲソノ人ニツケルノヂヤツイ　カウイフノハタヨリニ物ヲ
コトツケルト心ヲ人ニツケルト云ト何ガ同ジフ ヂヤニヨツテサ

鶯ヲ見ろし　打安いかなるをとと安とりがこし
凡河内みつ孫
ウハノ空ニ西ゆりふさゐこ
たゞ居ぬるつかふ夢我安しよりと申我ふのこ物をおりしかれ
○ソラヲ飛デイク始メテノ居ノ声ヲ安ヤウニ人ノ声ヲハツヽニ安テカラ心ガヒ
タスラ　ウテウテンニナツテ　サテモヽ物思ヒヲスルフカナ
清ゝゆき
万十一
天雪の八重ゆかくとはる神の音ふのこやも恋をしりなん
色すハくりゐるかふ鳴神乃音ゝりきてつゝこひとる家ヲ邪
○アハレサウナモヤウハ音をイフデ雪ノ中デ鳴カミナリノ音ヲイ音ヲヨソカラ
安ヤウニ　音ニバツカリキイテ月日ヲタテルフカナ　コホドニ意ミイノニ

よみ人しらず

かた糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせん

○一節ヅヽノ糸ヲ合セテ玉ヲツナグ緒ニヨラウト思フテソノ糸ヲアチラヘコナタ
ヘトヨリカケテ　モシ一ツニ合イデ緒ニナラズバ　玉ツナグ緒ニハ何ヲセウゾ　ワシガ
命モテウドソンナ物デ　サヤウニイロイロトスレドモ　モシ娘ガ逢ハレズバ　ドウシ
テ命ガツヾカウゾ

絲打交おもふこゝろにかなふこといふこと
のはなろしこゝにハよいさよるさる絲いへるのにかて男女
のこゝろにかなふことをもとへてるゝハなし

夕ぐれハ雲のはたてに物ぞおもふあまつそらなる人をこふとて

○ユフカタニハ雲ノ旗手ト云テイロイロノ雲ガタツ物ヂヤガ　テウドソノ雲ノタツ様
天ノヤウデ何ノ手ガヽリモナイ空ノ人ヲ思フトテ　ワシハユフカタニナレバ
ソノ雲ノヤウニイロイロト物思ヒヲサシマスル

かりこもの思ひみだれて我こふと妹しるらめや人しつげずは

○苅(カツ)メテコモノ乱レルヤウニ　ワシハイロイロト心ガミダ(ヅ)レテ　サヤウニ思フト云フヲ
妹ハ知ラウカイ人ガシラサズバ　コレホドニ思フトハ知リハスマイ

つれもなき人をやねた(オテモ)く白露のおくとはなげきぬとはしのばむ

○国(三)オキルト云テハナゲキ寝(子)ルト云テハシタウテ　アノアイソモナイ気ヅヨイ人
ヲサヤウニ思(オモ)ハウコトカヤ　サテモ妬(ねた)クサテモノチヲシイコトヤ　ドウゾ思ウマイゾ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』　請求記号 WA18-7
ガラス使用

ちはやぶるかをもおやしの御のゆふちはしは一日も思ひ絶ぬ日はなし

○上 ワシハ一日モオマヘノ事ヲ云ヒダシテ思ハヌ日ト云ハナイ

家意をむるし 祀そしふみちぬしし思ひやまども行方をなし

○ワシガ意ハ ケシカラヌ意デ虚空ヘ一ハイニフサガツ タサウナ サウ ヂヤ カシテ思ヒヲハラシテヤラト思ヘ ドツコヘモ行クホガナウテ ナンホウデモ思ヒガハレテユカヌ

と家が祈る毎ごとにうしろ浪たゝぬ日もなしとも思ひこひぬ日はなし

○レタゴノ浦ノ浪ハ大方イツデモ立ツガソレデモタマ〳〵ニハヌ此浪デモタヽヌ日ハアレドモ

ワシガオマヘヲ意シウ思ハヌ日ト云テハ一日モナイ

ゆふづくよ 行きや思ヘ乃松乃葉にいかなるとてかゝる意もしたゝぬ那

○アレアノユフ日ノ新ノサス思ノ松ノ葉ハ四季共ニ同ジ色デイツト云ワカチモナイガ

テウドソノヤウニワシハイツト云ワカチモナイ 意ヲマアスルヿカナサテモ〳〵

打咲ホ松を待ましてとゆるはるゝ 其意なし

ゆしきにかゝる山下ゆかしこがくまて為 泥つ心をせまこぞかゝ家つ家

○山ノ陰ナ川ハシゲツタホイトニカクシテ ヨソヘアルエハせ子ヒ ゲウサンニサツ〳〵ト流レオ

チルモノヂヤガ ワシガ意モテウドソノヤウデ アルエヌヤウニカクシテハ居ルケレド胸ハ

サツ〳〵ト瀬ノ流レルヤウデ ソレヲせキトメウト思ヘド 中〳〵せキトメラレルヿデハサナイ

吉野川 いそきりとおし行ゆかしき意にはたゝしこひ思ひぬとも

○吉野川ハケシカラヌ早イ川デドウ〳〵ト鳴ッテ岩ヲ切リトホシテイクヤウニスル

ドイ流レヂヤガ ワシガ意モムネノ内ハ吉野川ヂヤ ソレデモタトヒコレデ死ニハスルト云

テモ 吉野川ノヤウニ音ニ名テヽ人ニハシラレマイゾ

毎年つを乃中ホも浸ゑ物にて成ると家意乃淵淵ともるき

○山川ハヨイ物ナレドソレデモ雪ゑ(タ)ニハ淵ガアツテヨドムヿモアルト云フヂヤニ

ソシガ意ハナゼニ淵ヂヤ淵ヂヤト云ワカチモナシニ イツモ不淵ノヤウナフゾイ

山ゑみ下ゆく水ハ志ゑ不のミ流(イツマテモ)てこひんこひハ志ぬとも

○山ガ高サニ上(ウヘ)ノ方ヲバイカズニ下ノ谷バツカリ流レルホノトホリニ ツシモタトヒ

分デコヒ死ヌルト云テモ上(ウハ)ベヽアラハシハスマイゾ イツマテモ心ノ内デバツカリ思フ

テ居ヤウゾ

思ひ出る事はの山乃いそつしいそ(ハ)ごそ物を意しれ物を

○その山の三口(クチ)ヘダシテイハ子バコソアレ 思ヒダシタ時ニハソレハ〳〵意シイ物ヲ

人しまびゑ思へどくらしくもなぬ乃来つむ花乃いろふいでるむ

○人ニシラサズニ心ノ内デバツカリ思フテ居レバキツウジユツナイ コレデハドウモタマラ

ヌホドニ 三口 イツソウ(五)チダシテノケウ

秋乃野の尾花りまじ口咲花乃色ゑやこひむ物よしをるミ

○ヒヤウニ心ノ内デバツカリ思フテ居テハ トテモドウシテモカウシテモ 五 逢ハレサウ

ナモヤウガナサニ シアンシテアレバ 上(ロ) イツソウチダシテカヽラウカイ

上ヨ打安の説よ所し

こがそのゝ梅乃けつえ(ほ)ホ雪ゑ物ゑ物ゑ物ゑ意もとるか邪

○アレコチノ庭ノ梅ノ木ノ高イ枝デ雪ガナクガ ツシモアノヤウニ声ヲアゲテナキ

モセウヤウニ思ハレルホドノ意ヲマアスル　アラレモナイフカナ

うしひきの山ほとゝぎすこがごとや思ふこひつゝしのぶてふ

○歌ルモヨヒトヨ深ラレヌニヨツテ咲テ居レバヒタモノ新云ガナクガ　アレモワシガ

君ヲ思フヤウニ意ヲシテ子ラレヌフカイ

こがごとや思ふこひつゝハこが思ふ意るごとやこひつゝといふ意之

夜明ハ屋どふ鳴ゆらぶるかやアヒ火乃いつまで家ヲ下りえふをむ

○夜デイハウナラ　テウト家ノマヘデタク蚊を火ノ上ヘアラハレテハモエズニ　イツマテモ

クスヽトフスボツテアルヤウニ　ツシガ身モ此ヤウニイツマデ人ニハイハズニ胸ヲモヤシテ

居ルフデアラウ　夜なれぞハ夜の抱まてしことへていくらバ

といふんがごとし　秋なれぞといふるも同じ意之

意せじとみるしし川ふせしみそ紀卯ハうけぐそ形りふをもし

○意ヲスマイト思フテ川手洗川デシタミソギヲ　卯ハトウヾ　オウケナサレヌ

サウナワイマアモ　サウカシテ子カラ意ガヤマヌ

うそれてふことぐふ形くハなふをうハ意乃みられのつゝ○をふをむ

○思ヒガ胸ニ一杯ニナルトキニハ声ヲアゲテアヽヽハレアヽヽハレトイヘバコソ少シハ胸

モユルマレ　ソノアヽヽハレアヽヽハレト云フサヘナクバ　意スル者ハ位テ心ヲヲサメウゾ

テウド萱(カヤ)ナドヲ刈テ乱レタ時ニ一トコロヘトリアツメテ結デツカ子ルヤウニ　意、

デ心ガミダレタ時ニハアヽヽハレアヽヽハレト云ノガ末子緒ヂヤ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7
ガラス使用

思ふまハ志のぶることぞまけにそる色まハ出じとなりひし物色

○ナンボシノンデアルテモ思フ方(ハウ)ガツヨイニヨツテ トウ〳〵シノブ方(ハウ)ガサマケタワイ

イツマデモ色ニハダスマイト思フタモノヲ

家意ゑ人志るゝ物やさきしつへ乃枕のミこそ志るゝ物

○此通リニキツウ思ベバソシガ意スルノハ人ガシラウカヤタレモ知ル人ハアルマイ枕

バツカリコソハ歌ル〳〵シテ子ル物ナレバ若シ知ルナラシリモセウケレ

つきぢふのをの〳〵志のハ〳〵思ぶとも人ゝ深くめやいふ人なしに

○一二 此ヤウニ思ンデ思フト云フモ君ハ知ウカイ知リハスマイ 云テキカス人ナシニハ

人しまぬ思ひや物ぞとつしかきそれまぢりきまぢりもつかりしれ

なるさ

○人ニシラサヌ此思ヒトシタフハイノ 三 マヂカイ ホヂヤケレビ ナゼニアハレルモヤウ

なぞと五

ノナイフゾ

思ふともこふさきにはむ物なれや思ふてもなほ〳〵とゝる下ひも

○イカホド思フタト云テモコヒシタウト云テモ色ハレウ物カイ ドウデアハレルフデハナイニ

又シテモ〳〵ムスブチモダルイホド世ゆ〳〵下紐ガトケル 想躰シキリニ人ニ色ヒタウ思

フ時ニハ下紐ガトケルモノヂヤト云フヂヤガ ソシハナニホド色ヒタウ思フテ下紐ガト

ケタト云テモトテモアハレハせ子バ イカノセンノナイフヂヤニ

打変下句の説上句ホクけ合フてつし

いで家を人なとり先そ大ぶ事ゆゑこのとゆるこに物なりふらろぞ

○イヤサコレ考格タチソノヤウニトガメテトサルナイ　ワシハ大キナ舟ノ沿ニユラレルヤウニ
抱ヒデウカラ〳〵トシテ居ル時苦ヂヤ　スヤアヂナ那ツキニアルエルハズヂヤ
いせ物ゝみに釣ゝる所ゝ也　私ゝ也と何を作ゝ事かゝ
○意ヲスルワシガ心ハ　伊勢ノ海テ獵師ノ釣ヲスルウチヂヤカシテ　フハラ〳〵トウ
カレテ　シヅメウト思ウテモドウモシヅメラレヌ　釣ノウケト云物ハ沿ニユラレテフ
ハラ〳〵トウキアルク抱ヂヤガテウドソノヤウニサ
いせの海乃海のつゝ和そくらくてくるしとのゝや思ひ浪しむ
○[二]意ユヱニ長イ月日ヲ此ヤウニジユツナイフヤトバツカリ思ウテタテルフデアラウカ
浪川ゝみなりゝ我ゝ無ゝ○ゝむ方の思ふ時乃ゝ身ゝ有りゝ

○浪川ト云川ノミナカミハドコヂヤカトナゼ思ウタフヤラ　其川ノ源ハドコデモナイ
此抱ヲ思フ時ノワシガ身ヂヤワイ　ハテ浪ハ身カラ出ルハサテ
無稱しゝ海ゝ岩ゝ松ゝ有ひ乐ゝりこひをしこひバ海ゝざしゝ　めやハ
○夕子ガアレバ岩ヘモ松ハハエルワイ　スヤナニボ出来ニクイフヂヤトテモ　落分骨ヲ
折リサヘシタナラアハレヌト云フガアロカイ　ドコゾデハ是ハレヌト云フハアルマイ
ゝきゝしゝ川ゝ旁ゝ其ゝのゝうゝ見て思ひの海ゝ無ゝ
○毎朝タツ川ノ旁ノ中ニウイタヤウニ　イツモ落付ヌ思ヒノアル世ヂヤワイ
ゝゝしゝ流ゝ時しゝ和ゝ是ハ海しゝゝの思ひみゝゝ是て孫をのゝぞ　和く
○ワスレラレル時ガナケレバ[三]イロ〳〵ニ思ツテ泣テバツカリ居ル

かゝ衣をもなげれ不なるとれるかくとそ人をこひしき

○曰 [illegible] 毎日ユウカタニナレバカヘス〳〵モカノ人ガサ 意シイ

よひしに枕さゞ少くんりこも相しいかに弱し歌の夏に見えたるも

○イツゾヤ 意シイ人ヲ 夏ニアルタフガアツタガ 其歌ハドチラ枕ニドウシテ寝子タ

時デアツタヤラ 思ヒダシテアルレドオボエヌ ソレユヱ 此ゴロモ 毎晩ドウゾヌ

夏ニアルヤウト思ヘド ドチラ枕ガヨカラウヤラ 定メヤウガナイ

紐射打ツ共に上句所説とかくりよく上下の詞を味ひて知べし

意しきにいのち殘りある相なしバ恋ふるやそくぞ詠るべかりけり

○命ヲ此意シサノクルシイノニカヘテ死ナルヽ相ナラ 死ヌルノハヤスイフデサア

ラウト思ハレルワイ 此クルシイメヲせウヨリ死ンダ方ガハルカマシデヤ

人乃身も相しいし相をいかそのしていざこころみん意やしぬると

○人ノ身ト云相ハ何デモナラハシカラナモノデヤニ 意シイ人ニアハズニ居テモソレガナ

ラハシニナツテ其通りデ居ラルヽモノカヌソレデハコタヘラレイデ死ヌル相カ

ドレヤ 急ズニ居テタメシテアルヤウゾ

恋のしぬるバ見るしの相の人恋もぞ思ふてそと知まふかたしん

○思フヲカクシテ居ルノハサテモ〳〵苦シイニ 此ヤウニ人ニシラレズニ心デバツカリ思

フト云フヲ タレニナリ氏語リタイ相ヂヤガ タレニ語ラウゾ タレニモ語ラウ人ガナイ

未むよふしをそや相見なしむ先のまへ不つ見相き人を苦と思ふ

○イツソヨウ来世ニナツテシマヘバヨイニ　ソシタラ此現在目ノマヘニツレナイ人ヲ
昔ノヨイヂヤト思ハウニ　昔ノヨイヂヤト思フメラ此ヤウニツラウモ思ハレマイワサ
はるもなき人をこふとて山ぢこれこゝろへ出るまで歎きつるかね
○アイソモナイ人ヲ意シウ思フトテワシハマア　山ノ中ナラ　コタマガヒヾクホドニ
サテモ〳〵大キナタメノ息ヲツイテナゲイタフカナ
初のしらぎかくよりもたかる現在思ハぬ人をおりふれり　来るも
○流レテイクのへ物ノ数ヲカキトメルノハ　ヂツキニ消テシマヘバ　何ノセンチイ
ラチノアカヌフヂヤガ　ソレヨリマダラチノアカヌフハ　タガイニ思ヒモセ
ヌ人ヲ　コチカラバカリ思フノヂヤワイ

人をおりふしたる家ゝ　○ぞやあれまどふぶ志ゝ見ざるらん
○人ヲ意シウ思フ心ハ家心ヂヤケレド　家心デハナイヤウシテ　此身ノマヨウフ
ノサヘシレヌ　モシ此心ガキツト家心ニチガイナクバ　家身ノマヨウノガシ
レヌト云フハナイハズヂヤワサテ
おりひ家ちかひてるかふ形りやまるまとの夏浦ふ所の人の為さ
○人モナイハルカナ思ヘイタナラ道デ逢フ人モアルマイガ　テウドソンナモノデ
ワシガ意シイ人ノ事ヲ思ヒヤルモ心ノユクヲモ　ハルカニをウナツタカシラヌ
ソウカシテ　アチコチト思フテ　着アルテモ　思フ人ニ逢フガナイ
打安上月れ道しこがへり

夏ぬらちにゆひこむと我れこつくらしをるよひハ稼んかたもなし

○せメテハドウゾ夏ノウチニ夏ハウト思フテ夏ノ内カラソレヲ稼ミニシテ善ウシ

夕ニ夜ハ　ドウ寝(子)タナラ夏ニ見ラレウゾ　ドウ寝タ物デアラウゾト心ガ

マヨウテ　ドウモ寝様ガナイ　結構打咲共に結句我とまこ

ゆゑ　上なるいかに稼し　歌の夏ハ見えたむといふ事と合せて人の

意志稼とそるつきぬらしうしぐ　見(タマ)れよ稼るそかしに夏ハ見えて

○コレハマア意デ死ンデシマヘト云フサウナ　ナマナカニ歌ハヨヒトヨ

○夏ニ見エテ　ソシテホントニハ子カラアハレイデサ

浅川まつし流るしら紅の上ハ夏もさこぶかに見えたぞぞ有家

○浅ガ川ノヤウデ枕ガ流レテ　川舟ノ中デ浮(ウイ)テ寝ルヤウナ　カウイフ浮

寝デハ　見ル夏モハキリトハ(サ)見エヌソイノ

意ヒれぞ家所ハ親と称りかたきさきて人りそいぬものゆゑ

○意ヲスレバソシガ身ハ此ヤウニヤセテ　親ノヤウニナツタワイ　サウカト云テ思フ

人ニ涙(ヒ)モセヌモノヽ　ノセニサ　親ナラ人ニソヒソナ　モノヂヤニ

かぐ見火ハ何しぬ見ぬ身の形ぞもかく浅乃川ハうれてもなし

○鵜飼舟ノカヾリ火コソ川ニウイテモエル物ナレ　カヾリ火デモナイワシガ

身ノナゼニマア此ヤウニ浅ノ川ニウイテ胸ニ思ヒノ火ガモエルヿヤラ

うぐ見ぬ乃親と称る所ぬ見ぬしきる流まつて下にもなる称り

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7
ガラス使用

○川ヲ流レテクダル鵜飼私ノカゞリ火ノウツくタ親ハ水ノ下デモエルガ　ワシモテウドソン
ナモノデ　恋ニヤツレテ親ノヤウニナツタ身ノ親義ナフハ　毛イ月日ヲ心ノ内
デバツカリ思フテム子ノモエルノヂヤワイ
早祀漱りみる先ひをば家独乃後の川ようしまし　ものを
○ミルメハ海ノ中ヘデケル物ヂヤガ　ソレガ若シ川ノ中イ漱ヘハエテソダツナラ
ワシガ独ノ後ノ川ヘウヱウモノヲ　ナゼニナヤ　ワシガ後ハ中イ川ノ漱ノヤウニ
流レルソシテ恋シイ人ニ逢フヲミルメト云ニヨツテサ
かきへ（清）ともよくぬらぬ　そ此後のくへ　ホみぐ　ことてのこや恋後りなむ
○ワシガ恋ハ沖ノ方ヘモ後バタヘモヨラズニ沼ノ上デ乱レテアル藻ノヤウニ　ドチ

ラヘモツカズニ心ガミダレテ　イツマデモ此ヤウニ恋シイ〳〵ト思フテバツカリ月日ヲタテルフデアラウカ
何しかゞそ此さるぐ入江乃白浪のしきしぞや人をかくこひむとハ
○上人ヲ今此ヤウニ恋シウ思ハウトハユメニモシラナンダフヨ
人ゑ見ぬ所ひをつ孫ふ　さるが如る　ぬしぐ　此山こそ家身ゆり　家し
○常住人ニシラサヌ思ヒヲスルワシガ身ハ　外ニハナイ　後河ノ富士ノ山ガサ　ワシガ身ヂヤ
ワイ　ナゼト云ニ富士ノ山モ火ハ見エズニ常住煙ガ立テモエルハサテ
そぶ為ぬ　ゑもきこしぬ　ひく山乃ぬり　紀こゝ　後を人ゑ　ゑし　ゆむ
○イカウ涼イオク山デハ鳥ノ声モセヌモノヂヤガ　ソノクラ井ノ奥山ホド涼イ此
ワシガ心ヲ　思フ人ハサウトハ知ラヌサウナガ　ドウゾ知テクレカシ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7
ガラス使用

[illegible]坂乃ゆふつ来るもこがぶとし人や忘し紀称のミなくらむ

○名坂ニハナシテアルアノ末(ユツ)孫ヲ付タ鶏モ人ガ忘シイヤウ(五ウ)ナレト同ジヤウニ声ヲ

アゲテヒタスラ唱ヲ　打叟ゆふつけ鳥の説こゝろし

お坂の笑ヲ聞ゞるしいまし有いまでこゝろにおりひこそ出れ

○上イハズニ居ルデコソアレ心ニハタイテイ思フコデハナイ

[illegible]紀菜ゆふへ[illegible]ゆふ聞ゆるゆふ聞ゆや涼きん我忘るゝ心との聞き

○ソシガ涼イ心底ハ　ウヘニハ浮菜ノシゲツテ見エヌ渕ヂヤカシテ　此涼イ

心底ヲ人ガ知テクレヌ見エヌサウナ

うちつゞびてよばしむ夢ホ山ゑとおもふへぬ山をなりしとぞ思ふ

○サシツマツテセンカタナサニ大キナ声ヲシテヨバヽツタナラ　ち声ニハヨモヤ　コタマノ

ヒヾカヌ山ハアルマイトサ思フ　大キナ声ヲスレバ必コタマガヒヾク通リデ

ワシガコレホドニ思フコトナレバ　アチラカラモ何ニトゾ思フテクレソナモノヂヤ

うれがへせるものにそがかゝこゝひる苦きぬと人に忘しせん

○タガヒニ人ノ心ガトリカヘラレル抱ニシタイ　ソシタラコチノ心トアチノ心ト入カヘテ

片思ヒハクルシイモノヂヤト云フヲアノ人ニ思ヒシラサウニ

よそにしてこゝ[illegible]ばくるしいまゝ[illegible]もの月　心ふしぎむさびてむ

○今ノトホリニヘダツテヨソデ忘シウ思フテコ居レバ苦シイニ　毎方ノ組ヲ一所ヘ

ムスビ合スヤウニ　ドレヤコレカラハ一所ニコ居ルヤウニセウゾ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7
ガラス使用

同心ニといふるハ或人云かゝる姫ニ不同心結といふことなるによれり

喜しそばきある氷ハ云と思ひ思ひこゝ絶る事なれハ也

○喜ニナレバ氷ノ結ラズトケルヤウニ　君ガ心ハドウゾオクソコナウニ氷ニ打トケヨカシ

何事しそバ蝶のをりたへ喝ひしよるハ蛍ハ物ハ云ことなし

○歌ガ明レバ意ハ蝶ノヤウニヒガナ一日ナイテクラシ　夜ルハ蛍ノヤウニ思ヒニモエ

テサ　歌ヲアカスワイ

夜虫ハ身残しつゝ不明とそ云とハ思ひにより明りなし

○夜ノコロ虫ノ火ノ中ヘトビコデツイ氷身ヲムダニシテシマウノモ火ヲトラウト

云思ヒ一ツニヨツテノヿチヤワイ　人ノ意ヲスルノモチウドモ通リデ　人ニ心

ヲカケテツイ氷身ヲシモテノケルヿチヤ　アヽ意ハスマイヿチヤゾヤ

鉢射打曳共に云とつ思ひの説ならし

夕さ(清)ハいとゞ云ゞ氷独り秋の霧さへおきそそなるつて

○意ヲスレバ夕ゞサヘ(いとゞ)浅デカヤキニクイツシガ独ヘユフカタニナレバ此時節ノ霧

マデガオキソフテサ　イヨ〳〵カワカヌ

いのとても意しかしゞとはあし秋ども秋乃夕ハ何やしかなし

○イツヂヤト云テモコヒシウナイト云ヿハナケレド　壬閏ニモ別(ベツ)シテ秋ノ

時分ノユフカタハ又カクベツニドウモタヘラレヌワイ

秋の田ハ不ふこそ人をこひざる先ハどのんり忘しもせん

○二ソウト雖ハレテ思フリコソスマイケレ心ニハナンノ忘レウゾイ　ワスレハセヌ

秋の田乃ほのうへをてしはしるべ乃秋光秋まるもこれやつきとうし

○秋ノ田ノ稲ノ穂ノウヘヽ稲妻ノビカリト光ルホドノチヨツトノ事モ　ワシハオマ

ヘノコヲ忘レルカイ　ソレホドモ忘レルマハナイゾイノ

人見れ家かゝ何や秋花さく花家どうほふをてこひぞしもあらん

○人目ヲハバカル家ヲカイ何ニモ人目ヲハバカルコハナイニ　ワケモナイ（なやみ）

ナンノタメニ　レヤウニ　三アラハサズニバツカリ思フテ居ヤウゾ

何と言秋夏の夏ハ（結）かてふらぶけつゝとがりの思ひ乃志けきころ哉

○緑雲ノタマルカトフルレバエタマラズニクダケテ消ルヤウニ　オレハ心ガクダケテ

レナゴロハサテ〳〵抱思ヒノシケイコカナ

かく山乃さとが秋招志のぎ始る雲の景ぬとうしたむ恋乃志ぶきこ

○レヤウニ思ヒガシゲウテハ　ドウモタマラヌニ　上ワシハモウキユル死ヌ

ルト云テヤラウカイ

古今和歌集巻第十二

恋歌二

[illegible]

小野小町

おもひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを

○思ヒ寐(子)ニ寐タユヱニヤラ恋シイ人ガ見ヘエタ 夢ヂヤト知タナラサマサズニオカウデアツタ物ヲ ヨシイフヲシテサマシテノケタ

うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

○イツゾヤウタヽ子シタ時ニ恋シイ人ヲ夢ニ見テカラ 夢ト云モノハヨイ物ヂヤト思ヒソメテ ソレカラ又ヤウト思フテ夢ヲ頼ミニシテ居ル

いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞきる

○衣ヲカヘシテ着テ子ルト思フ人ヲ夢ニ見ルモノヂヤトイヘバ キツウサミシツマツテ恋シウテタヘラレヌ時ニハ 子マキヲウラガヘシテサ ワシヤ キテ子ル

素性法師

秋風の身にさむければつれもなき人をぞたのむくるゝ夜ごとに

○秋ノ風ガ身ニシミテ寒イケレバ ワシガ思フ人ハツレナイ人ナレド サモシヒヨツト見エルコモアラウカト思フテ日ガクレヽバ毎夜ソレヲワシハ頼ミニスル

しもついづもでらに人のわざ(ツイゼンノ法事)しける日しんせい法師のだうしにていひける(説法ニ)事ばを歌によみてをのゝこまちがもとにつかはしける　あべのきよゆきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめのなみだなりけり

○しんせいノ談義ニトカレタカノ法華経ノ衣裏宝珠ノ事ニツイテサ ナニホ

ツレンデモ独ヘタマラズニコボレテ出ル玉ハ意ミイ人ヲエルヌ目カラコボレル涙ヂヤワイ

かつへし　こゆらち

おろかなる涙ぞ独ふむらさ物をせきかへれど為れつを物れらじ

○ワタシガ涙ハヌレソシナコツチヤナイ　ドウモセキトメラレヌホド流レテ流ノ事ヂヤ

スヤオマヘノソ独ニツマレヌ玉トアエルクラ井ノ涙ハオロカナコトイノ

宛ホ出時きさしの意の事合の事　藤原ゆしゆきの和語

意ひてうちぬる中ホ行かよふ夏ハとじだらハうつ物しなもし

○思フテモ〳〵アハレハセズ意アグンデスコシ子ムツタ事ニカヨウトアル夏ノスグミチ

ハドウゾホントノコトデアレカシ　夏デコソズツト逓ハレル悪(スグ)ナレ　ホントニハソン

○ナコハ及ビモナイコト　イツヽモコヒツビテ居ル中ヂヤモノ

中ハ思ふ人との中之物を絶対ホ弱ける中之といふハかなるべかし

絶しばらちぬるなどふとこそ有べ今也

こそ然えあきしによる波よるさへや夏ハ逓ハ人めよ(語)らむ

○宣ホントニ逓フ事デハ人目ヲハバカルモソノハズノコトヂヤガ　二　歌ル夏ニ逓ウト

アル事デマデ人目ヲハバカツテヨケルヤウニアルノハドウシタコトヂヤヤウ

をのくよしき

コレガ意ニ今みや乃がくれ此事ハ事ハ此やうぞさまされどさいる人の事

○ワシガ意ハ山ノオクニカクレテアル事ヂヤカシテ　明ミトシゲサガマサルケレド

サウト云フヲ知テクルル人ガナイ

きのうとも知り

よひのまもそうれくるゐる夜もしふまどひまされる意もとるふ

○アノヤウニ夜虫ノ火ヲトラウト思フテ飛入テ 宵ノ間ヲモエタモタズニツイ命ト

ヲシマウテノケルノハキツイハカナイフ チヤガ ソシガ此ヤウニ人ニアヒタイ〳〵ト思フテ

意ニ身ヲシマウノハ アノ夜虫ノ火ニマヨウノヨリハナホマサツテサテモマアハカナ

イフカナ 紐材よひのまもの説とうくり

多ちまゝ蛍より家ふもの[illegible]どもそ光るゐ[illegible]だや人の[illegible]

○毎日ユフカタニナレバ蛍ヨリモナホワシハ思ヒガモエルケレド ソシガ此ヤウニモエ

ル思ヒハ蛍ノヤウニ光ヲ見ヌカシテ人ガトカクツレナイ 光ヲ見タナラヨモヤ

カウツレナウハアルマイフ チヤワサ

ちゝ此紫ふかく霜よりとも云とりぬるコガ衣手ぞさえまさりける

○サヽノ葉ふへフツタ霜ハキツウサエル和チヤガ ソレヨリモヒトリ子ルワシガ独ガサ

ナホキツウサエテ寒イワイノ

コガ屋ど此菓のかまつ○ふかく霜乃まつえかくりてぞ意しかり 家

○上 イヤモウキツウ〳〵キエ入ルヤウニサ意シイワイノ

紐材打安共ふきえかくりの説とうしとてべてこれかくりしふかい

へとなどいふ数皆そうすれいとりて思し紀をいふ何之今ノ云

の後ハ不ヒ(え)かゝる(え)かゝる形ど多くいふと同じことなるをや

川の瀬より形びくゝ海藻乃みかゝるて人まさつて死ぬ意もさるか

○川ノ瀬ノ底ニハエテナビイテアル藻ノ水ニカクレテシレヌヤウニ思フ人ニシラレヌ意ヲワシハマアスルヿカナ

みぶのしてミ様

かきくらしぬるゝ雪ハ下ぎえ不消てものゝ思ふこ後ハ不も見ク形

○雪ノ下カラ消ルヤウニワシハ人ニハイハズニ(ナ)ゴロハホンニキエ入(ル)ヤウニ物思ヒヲマアスルヿカナ

思こゝる後乃ここふみちぬるゝバみをつくし(活)とぞ(若原ソ)ハ形り来る

○ミヲツクシト云物ハ海ノ中ニタツテアル物ヂヤガ ワシハ思ヲ意シウ思フテ泣ク

後ガテウド海ノ瀬(シホ)ノミチタヤウニ床一ハイニミチタレバ 其床ニ子テ居ルワシガ

身ハトントソノミヲツクシニ(サ)ナツタワイ ソシテソノミヲツクシト云名ノトホリニ身

ヲツクシテシマウテノケルデアラウ

しぬる命いきこそやとるとこてろふ玉ハをばりゆかむといふるん

○意デ死(ヌ)ル計命ガ若シヒヨツト生(イキ)ノビルヿモアルカ 物ハタメシヂヤニ ドウゾ短イ

玉ノ緒ノアヒダホドナリモチヨツト逢(ハ)ウト云テクレカシ

こびぬるゝバ志ひて志ぬもと思へどもこ夏といふ物ぞ人ぶの見なる様

○トツトモウ意ニナンギシハテタレバ ドウゾシテムリニ此事ヲ忘レウト思ヘモ 夏ニ

逢(ア)トヌルヿガアルニヨツテ又ヒヨツト逢(ハ)ビルヿモアラウカト ソレガ頼ミニ思

ハレテソシテ色ヒモセ子バ アヽ爰ト云モノハサ人ニ頼モシウ思ハセテオイテ何ノ
ヤクニタヽヌモノヂヤ 打咲ホ人ゴの然我人ゴのまれとなるハ多グヘリ
人ゴのませとこそ云べきれ然ハませの頼まりたる詞也
よそ人しらば
ことにあらくも称てそ此然ても意し紀ゥん我いづちやらバ言ふれん
○ナラヌフヲムリニ此ヤウニマアサテ〳〵子テモオキテモ意シイフカナ コレデハド
ウモタマラヌガ此心ヲドチヘヤツタラ此意ヲ忘レルデアラウゾ
意し紀ふるびて多ふしひまどひるバむなしなるまや称らん
○此ヤウニ意シイノニトツト雑義シハテヽモシヒヨツト魂ガマヨウテドコゾヘイン

デシマウタナラバ アトハ此身ハムナシイヌチガラニナルヂヤガ ソシテ思フ人ニアヒモセ
ヌムナシイ意ヂヤノニ 意デ死ンダト云名ガ称ルデアラウカ 此の句ハ魂のさ
アそむなしまかしと称る意を色すなくてむなしき意
なぐらふといふ意ふいひかもしるものを 紀貫之
見こゝる深し称くハかしこ称もむ○の行ちハいろかえ称まし
○君ヲ意テワシガ胸ハ思ヒ火ガモエルケレド 泣ク深デチセバコソアレ 此深ガナク
バキルモノヽムネノアタリハ思ヒノ火デ モエル色ニナルデアラウ
頼しらば
よとしそふ流シてぞゆく称こゝ川名もこれしぬみなと称りなと

○川ハ冬ニナレバ氷ツテ流レガトマル物ヂヤガ　ワシガナク涙ノ川ハ一日中流レテ

トマル時ハナイ冬デモ氷ラヌ水ヂヤワイ

夢路にも露やおくらんよもすがらかよへる袖のひちてかわかぬ

○夢ニ恋シイ人ノ所ヘカヨフ道ヘモ露ガオクヤウナ　ヨヒトヨ夢ニ通ヘバ夕

袖ガヒッタリトヌレテ今朝モカハカヌ　そせい法師

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞおきうかりける

○夢デチヨット逢ニデモ恋シイ人ヲ見タ夜ハソノ朝ノ床ガサ起(ハナレテ)トモナイワイ

藤原ただゆき

いつはりの涙なりせばから衣しのびに袖はしぼらざらまし

○真シイツハリヨリデテウソニ泣テ見セル涙デアラウナラ　恋シイ人ニ見セウトコソセウ

ケレ　ムヤウニ人ニ見ラレマイトシノンデキルモノヘ袖ヲシボルマイハアルマイニ

大江千里

ねになきてひちにしかども春雨にぬれにし袖ととはばこたへん

○泣テヒタヤウニヌレタ袖ヂヤケレドモ　モシ人ガトフタラ　春雨ニヌレタノヂヤトイハウ

としゆきの朝臣

わがごとく物やかなしきほとゝぎす時ぞともなくよたゞなくらん

○郭公モヲレガヤウニ物ガカナシイカイ　トキヲモナシニ夜ハヒトヨモノアノヤウニナゼナクヤラ

つらゆき

五月山梢を高みほとゝぎすなくねそらなる恋もするかな

○上 泣テバツカリ居テウカ〳〵トシテ心モソゾロナ意ヲマアスルヿカナ

凡河内みつ祢

秋雪の時を待て見るまきむりハさらぬ時も見わくなくに

○意スルデハルトキモナイ心デハトント立居スルノモソゾロデウカ〳〵トシテオボエヌ

清原ぬりやぶ

虫のごとこ思ふさそくハ我ゟ○ども浅のミこそ下に居ゞる也

○人マヘヲ思ブユヱニ虫ヤウニ声ヲメテヽハナカヌケレモ 内浅デハ浅ヲナガシテバツカリ(サ)ヨリマスワイノ

是点ノみこの歌の意合のこと よみ人しらず

秋なれば山とよむまで鳴庚りされおとし鶯やむとりぬる歌ハ

○ヒトリ子メ歌 オレガ泣クハ 秋(一)デ云ハウナラ山(ヤマ)チウヘヒゾクホドニナク庚ニモオトラウカ オレハ庚ヨリナホキツウナク

秋なれば ハ秋の相にてこと

へていはぐといはんがめし 反なれば其ゆるふ同じ

新しらず

貫之

秋の時ふみごとて咲る花の色の時ちくさふ相をおりふころかな

○上 ヒナゴロハイロ〳〵ニ心ガミダレテサテモ〳〵相思ヒヲスルヿカナ

みつ祢

むとりして相をおりへば秋の田乃いなばのそよといふ人のなきこ

○ヒトリ此ヤウニ拘思ヒヲシテ居ルニ三いるバのソレヨオダウリヨトシテクレル人ガナイ
ヒとりしてハ思とりて思へどハ思ふ事ハ皆ふるさ格之
ぬりやぶ
人を思ふ心ハ居ルに何ゝ称どもそれにのミ之形き渡るか邪
○人ヲ思フ心ハ雁デハナケレモ雁ノ真ヲ鳴テツタルヤウニ サテモ心ガウカ〳〵ト
ウハノソラニナツテ泣テバツカリタテルヿカナ 紙冊二之の句の注ひがこ
と形りかりそめ所言ハ有し 所受ゆゑ所説此事ハかゝるべ
とぞみ○
秋風ハかきなれ琴所都にさへたかなく人のこひしかるらん
○自身トヒキナラス琴ノ秋風ノフクヤウニ受エル声ニマデ人ガ恋シイ コヤウ
ナチヨツト(えうなく)シタヿニモヂキニ此ヤウニ恋シウ思フハドウシタヿヂヤヤウ
つし山紀
まこともかる淀乃さはれ為ふ見ハ法○よりことにまさるこゝが恋
○二淀ノ澤ノ水ヤウニ為ガフレバ拘サビシイ為ニツ子ヨリモカクベツニ恋ガマサル
やまゆゑ示侍なる人ハつかりしもとる
こえぬまハよし世所山乃ひらし為人づてふのミきてこゝるか邪
○ソチノ大和ノ国ヘマダコエテイカヌウチハ足タイ〳〵ト思フ吉野山花ヲ人ハナ
シニバツカリ受テクラスヤウナモノデ大和ニゴザルオマヘノヿヲツシガツ子ゞ恋シ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7
ガラス使用

ウ思フノモソノトホリヂヤアヽシンキナフカナ　郭内ゆゑまいといふ意よいふるりハ何ゆゑ

やよひぞ(ジブンニ)りふものゝ(イヒ)ことゝ(ケル)びゝる人のもやこふ又人(又外ノ人ガ)まかり

てせうそこそときてよみてつかし事る

霧なしぬんを花にしおきそ見て風ふくごとふものゝ思ひぞつく

○花ニハ霧ガオクモノヂヤガソノ霧デハナイワシガ心ヲ　オマヘノ花ニオキソメテ

コ居ルユヱ風ノフクメビニ　花ガヨソヘチラウカト　ソコヘ心ガツイテサ思ヒフガアル

新しらべ　坂上ノ山ノ里の里

家意にしらぬ嫁の山乃さらし花まなくちるともかゞぞハまさしじ

○暗部山ノ桜花ノ名中トチル数ハオビタヽシイフデアラウケレモ　ワシガシゲウ思フ意

ノ数ニクラベタナラマサリハスマイ　むかしをかけ万不よ里

冬川乃うへゝこれもする家形もやしろ流出て意ならんん

○ワシハウハツラノ氷ツテアル冬ノ川ヂヤヤラシテ(五らん)ソノ氷ノトヲ水ノ流レルヤウニ(ソト)ヘ

ハ形ハサズニ心ノ内デ長ノ月日ヲ意シウ思フテタテル　毎ごみ

毎花つをふ稀ざしいぐ先ぬらん花まれらる意も家ハさるべ

○ヲイ川ノ淵ニアル浮草ノ根モトノ底ヘツカズニウイテアルヤウニウイタ意ヲマ

アワシハスルフカナ　とゝのつ里

よひ〳〵ふぬぎてコがぬるかり花かをて思ハぬ時乃まもなし

○上　心ニカヽツテカタ時ノマモ思ハヌフハナイ

ゆづるちかさや乃中山井くり何しか人をかりひそめをん

○アハレモセヌ人ヲ 一二 ナマナカニ此ヤウニナセニ思ヒソメタヿヤラ

志きしろへ乃桃の下に海をゆきど人をみる物をかひさぞ首をる

○一 桃ノ下ニ浅ノ海ハアルケレド意シイ人ヲアルメハ サ ハエヌヿチヤワイ

年後へてきえぬ思ひを君がしよ家乃殺を粉さわり事つと

○何ン 年カキエズニモエル思ヒノ火ハアリナガラモ 取ルヽソレデモヤツバリ 袖ハ浅ガ氷

ルワイ 思ヒノ火デトケサウナ物ヂヤニ 清ヽ由なし

家意を志しぬ山路ゆゑ何しかりをる

○シラヌ山路コソマヨウモノナレ ワシガ意ハシラヌ山路デモナイニ 此ヤウニマヨウ心ハ サ

ナギナヿチヤワイ

ゆきかねがりしてかくかくごとハ殺のミこそ色まさりをれ

○二 声ヲアゲテ泣ン 血ノ浅ノ紅ハソメルタビニ 袖バツカリガサ 色ガマスワイ ツ子ニ紅デ衣キルモノ

ヲ染ルノハドコモカモ同ジヤウニコソ染ル物ナレ 袖バカリ染ルモノデハナイニサ

初二句反ノ初ニかしかれ乃ふり出てぞ形くとゆるとハ言ふ矣之此事にてハ

君といふ用ゆるを 嫌り出るを君をふり出て染ることを声をゆ

げてなくすゆいひかをしてり 結村四の句の説なるし

白むとみしし浅も年嫌をばかしらきなおふらつろひにもとを

○始メノホドハ白イ玉ヤウニアルエタ浅モ 時々年がへレバマツカイニ色ガカハツタワイ

みつ○

夜もしし我なふかしひかもこゝろかし家も思ひ乍ねんぬべらかなと

○夜虫ノ火中ヘハイツテ心カラ身ヲモヤシテシマウフ事ヲ　ヱヽハカナイオロカナフ　ヂヤトハ

ナゼニ云タリヤラ　オレモ夫ニ遅リ思ヒニ身ヲシモテノイルデアラウヤウニ思ハレル

風ふけバ雀ニコガラし志ゝ雲ハ結ぶ　毎ごみ孫

○上　サテ〳〵ル井モナイキヅヨイ君ガ心カナ

月新し家身我かゝる物なしバつきなし人もいはしやうん

○月ヲバ熱躰人ガアヽハレト思フテアルモノヂヤガ　ワシガ身ヲ月ニ替ウモノナラ　ツレナイ人

モアヽハレカアイヤト思フテクレルデアラウカ　結構　新といふよみをつけ

なる説なるし月新ハなく月之　姉うやぶ

こひし雅で毎ガ名をとしじよの中ハ此つ○雅きあといひ名なりとも

○ワシガモシヤ遅リデ意死ニダナラバ　ツレナイ人ハ　オレユヱニ死ニダトハ云ハズニ　タヾ下トホ

リニ世中ガ無常ナ物デ死ニダト云ヒナシテオクデカナアラウガ　タトヒサウハ云ヒナスト

モ　世間ノ人ハヨウ知テ居レバ　外ノ事デ死ニダトハ云マイ　君ユヱニ死ニダト云ヒフラ

シテ君ガ名ハ立デアラウ　貴ハ　こく

津の國乃難波乃ゆしハ此ハもそ家ニ志がきこゝがこひ人志るしめや

○難波ノ芦ノハルカニ見エルホマデビツシリトシゲウハエテアルゴトクニ繁イ此ワシガ意

ヲ思フ人ハカウトハ知ウカイ　コレホドニアラウトハ知ルマイ　然もあるふといふる事

芦の芽又張ル春などは言ハなしとじあるかなる事のこと

よそふまで月日へ示家志しまうおきぬしよるハいこそ称しまふ

○弓ヲ久シウチモサヘズニオクヤウニ思フ人ニ久シウ逢ハ子バ　其人ノ事バツカリ思ウテ

歌ハ子タリオキタリシテヨノメモサ子ラレヌワイノ

人志まぬ思ひのミこそつゞしられ己が形ぞきをば家のミぞ志家

○思フ人ニ知ラレヌ意ホドサナンギナコマツタ拙ハナイワイ　ヤウ云フ此ワシガ歌キヲバ

ワシバツカリガサ知テ居テ　ソノ思フ人ハ子カラシラヌヂヤ　ともの

ことふ出ていそぬだかりぞみなせ川下ふ遥ひて意しれもの我

○ワシガ意ハテウドノ名所淵川ノウハヘハ名ノナイヤウニアルエテ　下シタノ方ヲ名ガトホツ

テ流レルヤウナ拙デ　詞ニダシテイハヌト云バカリヂヤゾイ　心ハ当住思フ人ノ所ヘ通フテ

意シイモノヲ　みつ称

思我のミ思ひ称し　夏形まばこがんかしるなり来ると

○オマヘノ事バツカリヲ思フテ寐テアルタ夏ナレバ逢ウトアルタノモ　オマヘノナサケデハ

ナイ　ワシガ心カラアルタノヂヤワイ　とじこと

いのち示もまさりてをしくいる拙をみたてぬ夏ぬさもる形りなると

○今ホドヲシイ拙ハナイヂヤガ　ソレヨリマダヲシウ思ハレル拙ハ　意シイ人ニ逢ウトアル夏ノ

マダトクトアテシマハヌウチニサメルノヂヤワイ　其家みちの所つらきこ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7　ガラス使用

梓弓を手ばなすこそまされこひ乃こゝろ

○是ヨリモ上歌ガサカクベツニ意シウ思フ心ハマサルワイ　三法○

こゞ意ゆゑへも志しらびたてもなし　ゆゑ後クぎりと思ふぞかりぞ

○ワシガ意ハタトヘテイハビ居ヲイクノニ　ドコヘイクヿヤラサキモシレズ　ドコマデト云

限リモナイヤウナ物デ　ドウナルヿヤラ子カラサキノシレヌヿデ　行ヲイキトマリト

思フバカリチヤゾ

家のミぞかなしきるむこぼしをゆるせる年しなれバ

○世中ニオレホドカナシイ者ハナイワイノ　彦星ノ意ガ一年ニタツタ一度ヅヽナラデハアハ

子バ悲シイヤウナ物ナレド　ソレモ年ニ一度ヅヽハ逢フヿガアツテ一年モアハズニスギタ

年ハナケレバ　ワシホドカナシイ意デハナイワサテ　ぬるやらぶ

今はくやこひ志なまし後あひ見んと頼ましとぞ命なりける

○モウハヤ今ゴロハ意死ニデシマウデアラウニ　イツヅヤアハウトアチカラ約束シテオ

イタヿガアルヲ頼ミニシテサソレバツカリガ命トデマダカウ生テ居ルワイノ

みつ称

身の先つゝゆきて年ぬるいつたりにしりぬ後人を志しなむ

○イクタビカヽアハウト約束シテ頼ミニサセテオイテハアハズニ何年カタツ　三ダマシコト

ニコリモセズニヤツバリ頼ミニ思フ　ワシガ心底ノ深イ所ヲ推量シテクレカシ

とそ結つ也

いのちやハ我ニぞハ露乃ゆゑ物をゆゑにしかくぞ惜ひしかくぞ

○命ガサイ何ニチヤゾイ ホンノ雲ヤウナアダナ物ヂヤモノ雲(アウ)ニカヘテナラ 此命

ミマウノハ惜イコトハナイ

古今和歌集巻第十之

意哥之

やよひ乃法いしたりよりと志のびに人にものもいひて

後に為ぬそ(ショボ〳〵フリケル)ありきるによみてつかハし 章家

左京業平朝臣

おきこそせぞ称もをでよる後ありしてハ春の物とて我が見ひしつ

○オキルデモナシ子ルデモナシニ ウツラ〳〵トシテ歌ヲアカシテハ 又意ニナレバ ゼゴロノ云

ノヤウニ 毛為ハ春ノ物デ一日ナガメテ シニキニ心フテクラスヂヤ

なりひしの物語の歌に侍る女の物ゆゑによりて法かハし

章家 ゆきこの朝臣

つまじの物が見ふにまさる淺川 袖のミぬまてゆゑよしもなし

○打ツ(ヌグヌ)イテ日ヨリハワルシ 日ハ毛シ ヒマデサビシイニツケテハ イヨ〳〵シニキデナガメヲシテ

淺ノ川ガ名ガマシテ 袖ガヌレルバツカリデ ソシテ川ノ名ガマセバ淺ラレヌヤウニ

逢レサウナモヨウモナイ

がの女ふかりてかへしふよめる　ねりしらぬ　新語

淺ミこそ袖も見づゝ先淺川身さへ事がるときかバ為のまゝん

○袖ガヌレルトオツシヤルガ　ソヤオマヘノ淺川ガ淺ササニサ　サウデアラウツイ

袖バツカリヌレルグラ井ノ淺イコデハ　和ミニナリマセヌ　身マデガ流レルトオツ

シヤルグラ井ノ淺川ノ源サナラ　ソレデハ和ミニ成シマセウ　結構　打変口の

句の説なし　身さへ流るとハたゞ袖のミ見づるふむかへて深き

事をいへるのゝことへたることハなし

新しらび　よみ人しらず

よるべなミ身我こそをくへぶそつ見心を君が親と那里ニ紀

○近ウヨルタヨリガナサニ　身コソカウシテをウヘダテ居レ　心ハ常住オマヘノソバ

ヨハナレハセヌ　新ヤウニトウカラオマヘニソフテ居ル　結構ニ古ヘハよると云こと

我よるべといへるとといへるハ見ひとさることなし乃楽の方のべき可

の定れるをんの誤まる也

いこづゝふ行てハ来ぬる袖ゆゑにうんまくほしさふいざれたれて

○行テハムダニカヘツテクルモノヽクセニ　色タイト思フ心ニサソハレテハ　又シテモイキ

又シテモイキスルツイ　ドウ云テモアヒタサニサ

なれぬよのぬる白雪と清水見るバ家さへ事ぬべき相を

○逢ノツモルヤウニ逢ハヌ夜ガイクヨモ／＼ツモツタナラ　己ガ逢ノキエルヤウニワシマデガ共ニキエルデアラウト思ハレルモノヲ　サテモアハレヌコトカナ

此歌ハよめる人乃しれぬ柿本ノ人まろが歌なり

なりひらの朝臣

秋乃野に篠分し朝の袖よりもあはでこしよぞひぢまさりける

○秋ノ野デ笹ノ中ヲ分テトホツテキタ朝ノ袖ハキツウ露デヌレル物ヂヤガ　ソレヨリモ思フ人ノ所ヘイテエアハズニカヘツテキタ夜ガサナホキツウ涙デ袖ガヌレルワイ

小野小町

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまの足たゆくくる

○海松メノ無イ浦ヂヤト云フヲシラズニ海士ガミルメヲ苅ラウト思フテ足たゆく来ルヤウニ　アノ女人ハワシガ身ヲドウモ逢レヌ身ヂヤトハ知ラヌヤラ　スカシテ一夜モカヘサズニ足ノダルイニ毎夜／＼逢ウト思フテミエル　トテモアハレハセヌノニサ

此二句ハ是もてよみ侍る人なし　二句ハ書つゞけてあげすゝと

いまだ書あやまりつゝといへる歌まで句を下上に打かへして心得べき

格之歌をみる先みるめなき浦とあつ○かれなでとはいへることみる先あまき

浦とはいひなす我身といふことなりされば歌を惜むこともらしことを

いひかけたるにはあらず浦ハさしてみるめなきよれる句のことさて後

まことが身おもふらしくとよめる歌多きを此歌の句よりよれるなりけり

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7

ガラス使用

源宗于朝臣

いはぬしてこよひ明るは春の日乃明ぐくや人を待しと思ひも

○今歌ハゼヒトモドウアツテモト思フタニヌトウ〳〵エアハズニアカスチヤサウナ　今歌アハイデハモウアウベキ時節ハナイニ　ヰトホリデエアハズニ歌ガアケタナラ　春ノ此日ノ長イノニシンキニ思ヒクラシテ　イツマテモツライ人ヤト思フテ一生タテルデカナアラウ

みぶ乃ゐでみ歌

有明のつき明くるにしなほよそ曉をかりし紀有のハなし

○マヘ方曉ニ女ト別レタ時ニ有明ノ月ヲアルタレバ　シキリニアハレヲモヨホシテ　アヽアノ月ハ歌ノアケルノモニシラヌカホデアノヤウニ　チツトユルリトシテアルニ　オレハ歌ガアケレバ帰ラ子バナラヌフトテ　ゆりタイトコロヲ別レルフカヤト　身ニシミヾト思ハレタガ　ソレカラシテ　ヨニ曉ホドウイツライモノハナイ　餘程上句を詠みたるにてくるゝことせるハ家の入どころに明つ始る元がと思ひ給ふのことし　是ていふ事なるを給ふ人ハふとそこの我誤まる也　云悟も此集よりて誤まり

詠ひ給ふ事なれば

是とかなるぎさふしよ家治なれば悟えてのゝぞ立ちり事家

○浦ノ磯バタヘヨツテクル浪ノチギニ引テ沖ノ方ヘカヘルヤウニ　是ヲモナイ人ノ所ヘイクワシナレバ　イツデモソノ人ヲ悟ンデバツカリカヘルワイ　よミ人しらず

かりてよそ風ふさねぐ所浪なまやけふと明ぎ尓まぐこれらつゝん

○マダ逢タコトモナイサキカラアヲウ名ノタツノハ　云テミヤウナラ　浪ハ風ガフクニヨッテタツ物
ヂヤニ　マダ風ノフカヌサキニマ〳〵カタヤウナギニ浪ノ立ツヤウナ物カシラヌ　ナゼニサヤウニマダハヤ
ウカラ名ガタツコトヤラ

みちのくにありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり
たゞみね

○〔上〕ナイコトヲ云タテヽ名ヲタテラレテハメイワクナコトヂヤワイ

あやなくてまだきなき名の立田川わたらでやまむ物ならなくに
みはるのありすけ

○マダ逢ウカラムサウニ名ノタツノハワケノタヽヌコヂヤ　コレデハ逢ズニオカウ物デハナイ
もとかた

人はいさ我はなき名のをしければ昔も今もしらずとをいはん

○人ハドウアルカワシハナイコトヲ云タテラルヽ名ガ惜ケレバ　マ〳〵カモ今モソンナコトハシリマセヌトイハウ
よみ人しらず

こりずまに又もなき名はたちぬべし人にくからぬよにしすまへば

○マ〳〵カタモナイコトヲ云タテラレテメイワクシタコトガアツタガ　ソレニコリモセズニ　又ドウヤ
ウナイ名ヲタテラレウヤウニ思ハレル　世中ニチラヒデニクウナイ人ガアルデサ

ひむがしの五條わたりに人をしりおきて（ナジミヲコシラヘテオキテ）まかりかよひ
けりしのびなる所なりければかどよりしもえいらでかき乃
くづれよりかよひけるを度かさなりければあるじきゝて

つきまてがのそこによどに人を嫌せてまのしそれバいきもきまど
えぬるそでのミかへりてよみてやまとる
なまひしの新語
人志ぬまぐよひちが笑なるよひくごとふうちも称なくむ
○人ニシラサヌオレガ遊ヒミチノ笑所ノ番ハドウゾ毎歌ヨヒ〳〵ニチヨツトナリ
ト子ムツテクレカシ　ソシタラソノ当ニハイラウニ
新しらび
つゝ山ゆき
思ふ事ど意し紀と紀を詞しひ(語)きが山よまと月のいてゝこそらき
○カクシミノブケレドモキツウ意シイ時ニハエコラエズニ月ガ出テヨウアエル時分ニ
けやウニ出テサクルツイ
よみ人しらび
こひしてまれにさよひぞ詞の坂乃山のつけ当ハ和ぞもなしなん
○ハラ一ハイ意くテタマ〳〵今歌ハサ亀歌ヂヤニドウゾ座当ハマアナイテクレ
子バヨイガ　当ガナケバオキテ居レ子バナラヌ
をのこまとち
秋乃歌も名のミ形りとりけるとしくるごとぞとも和く明ぬるもの哉
○秋ノ歌ヲ出イ和ヂヤト云モクルバカリヂヤツイ　各〳〵意シイ人ニアウ歌トイヘバ　コレガ
カウト云フモナシニ　ツイアウ明メモノヲ　ナニノ歌ガ出カラゾ
凡河内みつ

去しこと思ひぞ出てぬ首よりけふ人かゝる秋乃歌ゐれば

○三アウ人ニヨツテ秋ノ歌デモ短ウオボエルモノヂヤト首ヤウ云トホリデ今ハ秋ナレ

ヒ スイタ人ニアフタ歌ヂヤニヨツテ 一去イ毛サドウモ思ヒキハメラレヌ イツタイハ秋

ノ歌ハ去イ物ヂヤケレドサ

よみ人しらず

志のゝ先ハ不がらしゝと明ゆけばおのがきぬ〳〵ぬるぞかなしき

○一目ガサメテ歌ガクツラリツト明テクレバ一ツニナツテ寝子テ井タ二人ノキルモノヲ

別ニニキテ別レルガサカナシイ 打変不がらしゝの説ニ云し 始めきぬ〳〵の説ニ云

藤原國範朝臣

明ぬとて今ハの心ぞくがしゝ不などしらひしらぬおりひそふしも

○夜ガアケタト云テ サアモウ いまハ おレルヂヤト思フ心ガツクカラシテ ナゼニコノヤウニ

イフニイハレヌ思ヒガソフコトヂヤヤウ

寛和の時きさきの文の方合ハ方 とし初朝臣

明きぬとてかゝる道にハこれとて見てゐ面も浅も濃りそわづ浅し

○歌ガ明タト云テ おレテ出ルカデハ物ヲコキオロスヤウニヒタ〳〵ト面モフルノニ

源モ同シヤウニフツテ イヨ〳〵ヒツタリトヌレテ サテモ〳〵カナシイナシギナフカナ

新しらず

霧

志のゝ先ハ日が見をしゝみ家ぞまが為よりさ紀に明き始めつ原

○目ガサメテ おレルガナゴリヲシサニ鶏ヨリサキ〳〵ソシガサマヅ泣キハジメタ

よみ人しらず

郭公夏のうつゝの朝霧乃おきてとりまし何のつきもなし

○三 オキテ おレタ 院ニ鳴タ 郭公ノ声ハキイテモ 夏ヤラウツヽヤラオボエヌ

打変よろし 雑歩こゝろし

むくしきなけど君が名ゝらぬべミ 歌 深くこし 我人ゝ見ゝむりを

○一 歌ガ明テカラ 立ツタナラ 人ガ見テ 君ガ名ガタヽウト思フタニヨツテ マダ歌

ノフカイウチニ おレテキタガ ソレデモモシヤ 人ガ見タカシラヌ

大江千里

ゆさいしをおきくむりこもしらざりの思ひいづるぞ消てかなしれ

○ケサハマアドウ 記テ来タヤラ 一向オボエナンダガ チヨヲ思ヒダシテ 今サ消

ルヤウニカナシイ 打変日 朝の説あまどさまでハ何しじし

人ゝ名て 朝ゝよふて きしゝる なり 記し 此朝 法

朝ぬるよ此 夏我ゝ家ゝまどろ先バいやたり朝ゝまを 放まさるゝ

○ユフベ 名テ 寐タノハドウデアツタヤラ 夏ノヤウデ アマリハカナサニ せメテハホンノ

夏ニナリ 此マイチド 見ヤウト思フテ 眼ツテミレト 子ラレモ せ子バ 夏ニサヘエ見イ

デ サテモ イヨ〳〵ハカナイフニナルフカナ

業歌 朝臣の いせ 此 去り 海りとり なる時 祈 高なり なる人 よしと

みそ ゝふ 河ひて 又の河しこふ人やる 其人 なくして 思ひ 居り

きるはかひごに女乃ちかくよりおこせたりをる

よみ人しらず

見やこし家や新たむかりわへ変美からつゝ称てゝ所見てゝ

○ユフベノ事ハ オマヘガ ワシガ方ヘ 出ナサツタノデアツタカ ワシガオマヘノ方ヘ 来ツタノデアツタカ 美デアツタカ ホントノ事デアツタカ 眼ツタ内デアツタカ メノサメテ居ル内ノ事デアツタカ ドウデアツタヤラ ワシヤ 子エカラオボエマセヌ オマヘハドウヂヤイナかへし

なりしの和歌

うれしらせて心のやミにまゞこひ給ひ見ゆらしてとは世人さゞめよ

○サイナ ユフベノ事ハ イツソ心ガクラガツテ 宮ノ歌ニ居ヲイクヤウデドウデアツタヤラ ワシモサ一向オボエマセヌ 美デアツタホンノ事デアツタト云フハ世間人実メテクレイ

題しらず

よみ人しらず

うれむ我やミ乃うつゝハ所ごゝ所る夏ふいくしもまさしぶり 名

○宮(クラ)イノニ チヨツト 重タノハ ホンノ事デモ タシカナ 美ニ何ホドモマサツタフハナイワイ 美ニフルタト同シクラ井ノフデアツタ

所ら姫来て所乃我と渡る月新りしなりしも見我重見つるか那

○上 君ニアフテサテモ マアマノコリ多カツタフカナ 三の句の ユハの誤にて上句ハ所ゝの所 所るべし乃楽に例多し

見が名も家名も無てしに那にはなるみ川ともいふなるなひきこもいれじ

○ドウゾ君ガ名モワシガ名モ名ヌヤウニセウ ワシニアウタト君モイフナ 君ニアウタトワシ
モ云マイホドニ　ゆゑきハ難波の縁ニ細引ハいひかせらるゝ
名放川をぞ結ぶりを来ゆゑ人ハ道バいふ心せんとかゆゑ見えそめたむ
○二 云ゐへ云シテ名ガタツタラ ドウセウト思フテアヒソメタヤウ
よし地川名ハ心ハやくさを見ゆ結ぶ者ハ云てしどとぞ思ふ
○吉地川名ノ早イヤウニ心ハヤルセナウ思フモ 渋ヤウニ吉ニハタテマイトサワシヤ思フ
意しくハ志ゑ我思へむしら結ぶ相さりの意色ニいりゐゆゑん
○意シウ思フナラ心ノ内デ思フテ居タガヨイゾ 三四 色ニダスデハナイゾカナラス
をのくさ縁かぜ

花さく紀不ふ出てこのぞ名を惜シ下ゆゑ志ものむさてぞ思ふ
○一 アラハシテ思フタナラ名ガヲシサニ 心ノ内デバツカリ思フデム五 ク中トシテサテ
モ〳〵クルシイ意ヲスルフチヤ　打変下ゆゑ組の説俗之
しら花結きよ紀の志のびよ行ひしきりなる女のもとよ
ゆゑこせしりなる　よミ人しらずで
思ふぞら志とりしがこひ志なバ為ふよそくて姉ぞ花きむ
○カウ思ヒアフタドウシノ内ニオマヘカワシカドチラゾヒトリガ若シコヒ死ニダナラ 服ヲ
着キヤウナレド 表ハ人夫婦デナケヤ 服ハキニクイチヤガ 親教ノウチニ誰ガ死ニダ
ニヨツテキルト云テ 服ハキタモノデアラウゾ

鉢開をとりくをこぼすのふせれるハ[illegible]ろし 打笑よろし ようべて
[illegible]とりくとしつるハ皆借云ふどうらぞ[illegible]とりとしつるを
[illegible]云ふどうらぞ[illegible]とりとしつるを
うへし
毎ちだ程のきよ紀
[illegible]きこゑる後り 舳のそわだなばぬぎ[illegible]よるこそなき先
○モシ二人ノウチドチラゾガ[illegible]死ンダ時ニハ カナシウテ泣テコヒシタウ後デ 実メテ
舳ガヌレルデアラウ ソシタラ ヌレタヲ脱(スギカヘ)替ガテラニ 夜ルサ服サバ着ヤウワ
サテ 夜ハタレモシルマイホドニ
[illegible]
こまくら
[illegible]

○ホントニハサウモアリソナ物デヤガ 夏ニマデ人目ヲハバカルヤウニスルワノナンギサワイノ
カギリ物き思ひ乃まくにふ[illegible]もこむ夏路をさくに人をなが先じ
○カギリモナイ思ヒニマカセテ 夏ニナリた行テ[illegible]ウ ホントデハカクベツナ 夏ニカヨ
ウ道マデヲ人ハスルトガメハスマイホドニ よるもハ夏ふるりとも之下に夏路
といふるあふよるといふり こむハゆうむ之例考ふ多し
夏路にハ行しもやうに先ぞ通へぞもうて ふ一めしぐどハ行しば
○夏ニハ足モヤスメズニセイダシテ通テ タビ[illegible] 逢トスルケドモ ソンデモチヨット一目
デモホントニスルタヤウニハナイ 夏ハヤウニそヌモノぞや よみ人しらず
思へども人めつゝみ(堤)[illegible]川とスルガごとくえこそこゑしら[illegible]

○恋シウ思フ人ヲ見テハ アヽアレハト思ヒナガラモ 人メヲツヽム心ガ イツハイヂヤニヨツテ ドウモ

ヨウアハヌワイ　此の句かしらハといふことを川によせたり

瀧つ瀬乃はやき心をなにしかも人めつゝみのせきとゞむらん

○早イ川瀬ノヤウニヤルセモナウ思フ心ヂヤモノヲ ドウ云フコトデマア 堤デ川ノ水ヲセキトメルヤウニ 人目ヲツヽシンデ 此ヤウニコラヘシノンデ居ルコトヤラ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　きのとものり

紅乃色にはいでじかくれぬ乃下にかよひてこひはしぬとも

○[三]心内デバツカリ思フテ居テ タトヒ恋死ヌルト云テモ [一]色ニハダスマイ

紅打出共ホト通ひてをとかよひのことゝいへるハこゝろしかよふハ沼の縁の絹までいへるのこゝまでにて下に思ふ意

題しらず　みつね

冬の池にすむにほどりのつれもなくそこにかよふと人にしらすな

○其所ノ家ヘワシガ通フト云フヲ人ニシラスデハナイゾ カナラズシラヌカホシテ居ルヂヤゾヤ

つれもなくハ結句へかゝれり 続新つれもなくの語なし 初二句ハ水の下を通ふよしにて 此の句の序也 又水の上よりハそれとみえぬ意にて 三の句へもかけたるなるべし さて底を其所にいひかけたり

さゝの葉におく初霜乃夜をさむみしみハつくとも色にいでめや

○笹ノ葉ヘフツタ霜ガ夜ノ寒サニシミツクヤウニ ワシガ恋ハモ シミツクヤウニハ思フト云

テモ　色ニダサウカイ　ドノヤウニアツテモ色ニハダスコデハナイ

よみ人しらず

山しゐ乃青ねの山ハ青りぶふ人のしるべくコがこひめかゝそ

○ナンボ意シウ思フトテモ　一二　青ニモ人ノシルヤウナフリヲセウカマア　ソノキヅカ此ハナ

イワイナ　此ゑ詠る人あゝ此ゑ称べのとなんやい

きよいしハふかや姫

みかしゐの流れ見る事ハ我ひがこゝみるめハ浦による我こそまそ

○一　流辺　昼ノアイダガ逢ガタサニ　四　来ルヲサワシハ待ツワイ

平貞文

白川乃しらずともいそじ底きよこゝ我がまそよゝ不とまんと思へバ

○人が問タラ　一　知ラヌトモイハウナレドサウハ云マイ　オヤ　三　真実ナ心底　チヤカラハ

イツマデモ末モウツレソハウト思フ心ナレヤ　ソノヤウニナニモ人ニカクスコトハナイワサテ

そそ此ゑ

しるこゝふ道バらるし　むのをれ知ゑえてみぶるゝ　む人なとがめそ

○心ソ内デバツカリ思フテ居レバキツウジユツナイニ　モウワシモイヅソ打出シテ　三　こえて

ミダレウ　ソシタラ人ノ目ニカヽルデアラウガ　必ス　タレモトガメテ下サルナヤ

家意をしのびかねて　得　しき　唱　れ山しらたれの色ニ出ぬべし

○ワシガ此思ヒヲ今マデハマアドウヤラカウヤラ思ビカクシテ居ルガ　コレカラモウ　二　ドウ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7　ガラス使用

○モコタヘラレヌヤウニナツタナラバ 回色ニデヽ人目ニモカヽルヤウニナルデアラウト思ハレル

よみ人しらず

大かたハ家名もみなとこ絶出なるむよ後らしへしらふみる先にしる

○後バタハ海松(ミル)メガスクナサニ舟ヲ湊カラズツト沖ヘコギ出シテ海ノ上ニミルメヲ刈ヤウ

ニワシガ中モ 一 大ガイナフナラ モウ名ノタツフヲカマハズニ 三 世ヘバツト打出シテシマハウ

カクシ思フ中ハ 五 思フヤウニ度々モ色ヒヌガ イカニシテモウイフヂヤホドニ

鈴射打安よをらしミの説なるし世ハ男女の中をいふなるて思ふ

中をらしく思ふよし又鈴射船の名のさらに無用也

家貞文

松よりと又し家人も相きき意我なるぞせきなくぞもしつるか

○ワシガ意ヲバ松ハドウカラモ知テ井タフモアラウガ松ヨリ外ニハヌト知ル人モナカ

ツタニ 須ヲドウモエセキトメイデ ツイモラシテノケタツイ サテモ〳〵ツライフヲシタフ カナ

よみ人しらず

風ふけバ沼ろつ岸乃松なれや私ハ行ハ見て相きぬべらし

○風ガ吹テ沼ノウチヨセル岸ノ松ハ根ガ取ハレル和ヂヤガ ワシガ意モソンナモノカ

ドウモコタヘラレ子バ ドウヤラ子ニアラハレテ泣(キ)サウニ思ハレル カウ云ノハ声ヲアゲ

ルフヲ子ニ取ハレルト云ニヨツテサ

此家ハ有る人のいとしくかきのもゆきの人を待がし

池にさむ名をしらぬ浅ミがくるとそれと形ハ見ふ名也

○池ニ住デ井ル鴛ノ形ノ中ヘカクレルト思ヘドイカガ浅サニアラハレルヤウニ ワシガ恵モ名ノタツヿヲ情ウ思ツテ 語分カクシ思ブヤウニスルケレドゼヒモナイヿアラハレタワイ

ゆふとハ玉の緒だかり名ハ多川ハよし地の川の瀬つをのごと

○玉ヲツナグ緒ハズンド細イヒヨワイワヅカナ物ヂヤガ ワシガ中モ重ヲハテウドソノ玉ノ緒グラ井ノワヅカナヿデ ソシテ名ノ立ツコトハ吉地川ノ事イ瀬ノ音ノ事イクラ井デソレハヽヤカマシイヿヂヤワイノ

むらぬ名ハたちにし家名今さらふことなし嫡ともしるしゆらめや

○[一]一タビ立ツタ名ハモウドウモゼヒガナイ 今サラ ワシヤ ソシナヿハナイト云ヒワケ

五

シタトテモヤクニタヽウカイ ナンノヤクニタヽヌヿヂヤ

おとなしふの泊打安よろし 鉾射ころし

君ふよりて家名ハ花ハ春霞地ハ山ハも立みちふ名也

○君ユヱニワシガウキ名ハテウド地ヤ山ノ花ニ霞ガ一メンニタツヤウニドコカラドコマデ知ラヌ人モナイヤウニナツタワイナ 花ニ霞ノタツノハツライモノヂヤガ ウキ名ノ立ツタモ同シヿデサテモツライヿヂヤ

花ふといふ之の説鉾射打安そふころし

伊勢

しるといへど枕ぶふせで称し物をちり形ゝぬ名の末ふころし

貫 7 6 52

○ナンボカクス意デモ枕ハヨウ知ルト云フチヤニヨツテ　ソヽヤ枕サヘ（セズニ寝タモノヲ誰）
ガマア知テウキ名ガバツトヽるウ立ツタフヂヤヤウ　塵コソ云ヘ（タツモノナレ）塵デモ
ナイウキ名ガサマア

をかく見口の巻の終

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集遠鏡 20巻』 請求記号 WA18-7

ガラス使用